

人口減少逆張りビジネス

現代社会研究所 所長
青森大学 名誉教授
古田 隆彦



目 次

概要	- 1 -
はじめに	- 1 -
序 人口減少市場のつかみ方	- 1 -
(1) 2 つの基本視点	- 1 -
(2) 人口減少の推移と真因	- 2 -
(3) 人口は波を打つ	- 3 -
(4) 人口減少対応の基本視点	- 4 -
(5) 人口減少が生み出す新需要	- 5 -
1. 量的縮小 = 3 縮化には機能的対応	- 6 -
(1) 総人口減少を逆張りする	- 6 -
(2) 年齢上昇を逆張りする	- 7 -
(3) 家族縮小を逆張りする	- 8 -
(4) 量的縮小を逆張りする「6 別化」戦略	- 10 -
2. マーケティング戦略は大転換	- 10 -
(1) 成長・拡大社会から飽和・濃縮社会へ	- 10 -
(2) 成長・拡大型マーケティング戦略が終わる	- 11 -
(3) 飽和・濃縮型マーケティングへ向かって	- 11 -
(4) 浮上する 6 差化戦略	- 14 -
3. 質的变化 = 3 超化には心理的対応	- 14 -
(1) 6 差化戦略の先行事例	- 14 -
(2) 6 差化戦略の有望方向	- 16 -
結 人減先進国・日本をめざして	- 20 -
(1) 人口減少は世界のトレンド	- 20 -
(2) ル・ルネサンスが始まる	- 21 -
(3) 人減先進国へ向かって	- 22 -
終わりに	- 23 -

概要

■概要

人口減少の進行でマーケティングの理念が根本的に変化する。間もなく始まる世界人口の減少は、人類社会の新たな展開を示唆している。その先端を突っ走る日本では、従来の成長・拡大型社会から飽和・濃縮型社会への転換が急がれる。マーケティングにおいてもアブラハム・ハロルド・マズローやフィリップ・コトラーに代表される成長・拡大型の時代が終わり、人口減少に見合った心理と願望を捉える飽和・濃縮型への転換が求められる。

■ポイント

- ・人口波動で未来を読む
- ・世界の人口も間もなく減少
- ・人口減少の真因を見抜く
- ・ル・ルネサンスが始まる
- ・人減先進国・日本へ向かって
- ・生活民の意識が変わる
- ・マズロー&コトラー理論が終る
- ・生活民マーケティングが始まる
- ・生活願望を新視点でとらえる
- ・成長・拡大型から飽和・濃縮型へ
- ・マーケティング戦略は6別化から6差化へ
- ・450の先端事例で先端ビジネスを考えよう

はじめに

本日の構成は、最初に量的な縮小の問題。続いて質的な変化という問題。質的变化に向けて、マーケティング戦略も大きく変化するべきだ、という展望。そして、最後には今後の日本の進むべき方向を展望する。※自己紹介は略歴欄参照。

序 人口減少市場のつかみ方

(1) 2つの基本視点

日本の人口減少は2008年から始まったが、始まる前の20〜30年前から私が問題にしている現象である。以下に基本的な2つの視点を示し、後に詳述する。

①人口波動論

人口という現象は波を打っているものであり、伸びるときと下がる時がある。世界の人口は過去に5回の波を打っており、日本でも同様だ。

②生活民という立場からのマーケティング

消費者、生活者という立場を超え、より全体的な生活民という視点からマーケティングを提案する（詳細は(4)の③）

この 2 つを重ね合わせることによって、人口減少社会における、新たな生活市場の構造を展望することができる。

（２）人口減少の推移と真因

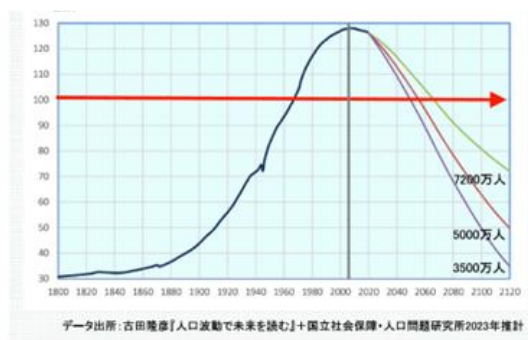
①政府の予想（図１）

政府機関の最新の予測によると 2008 年にピークを示した日本の人口は今後も減り続け

- ・最も高く推移した場合→2067 年に 1 億人を割り、100 年後には 7,200 万人にまで減少
- ・最も可能性の高い予測→2056 年に 1 億人を割り、100 年後には 5,000 万人にまで減少
- ・最も低く推移した場合→2050 年に 1 億人を割り、100 年後には 3,500 万人にまで減少

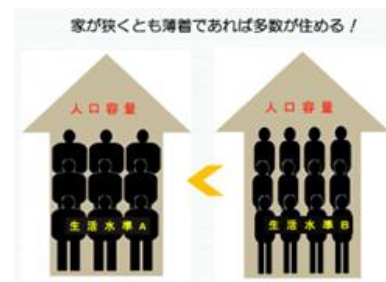
現況の見通しでは、おそらく低い方に行く可能性が強い。

図 1



©古田隆彦

図 2



©古田隆彦

②なぜ人口が減るか

1) 人口抑制装置が作動

人口が減る理由として「少子高齢化」が喧伝されているが、それは非常に表面的な問題だ。本質的な問題は異なり、トマス・ロバート・マルサス以来の人口学の立場に立てば、人口容量が上限に達しているということだ。人口はどんどん伸びていくが、やがて一定の地域／1つの国／地球全体が1つの文明によって作り上げられている人間の容量というもののピークに達する。人口はそこまでは伸びていくが、ピークに達すると人口の抑制装置が働き人口は減り始める。日本ではこの 14～15 年間このような社会が続いており、世界もまたまもなく同様になっていく。

2) 人口容量と生活水準

日本では人口容量が 1 億 2,800 万人で一杯になり、その時点では一人ひとりの生活水準